

アイスホッケー競技会帯同報告

平成 27 年 1 月 28 日～2 月 1 日の日程で国体アイスホッケー競技会が群馬県で開催されました。通算 8 回目の国体アイスホッケー競技への帯同になりますが、今回も初回帯同からご一緒している青森県トレーナー部会の近江俊正先生とのコンビでした。今年は成年、少年の会場リンクが離れており、さらに試合時間も重複したことで成年チームを中心にサポートしました。

国体アイスホッケーではベンチ入り選手が 16 名に制限されているため、大会中のけがや病気は即戦力ダウンにつながり、メディカルサポートは大切な役割をはたしています。

大会中は、主戦ゴールキーパーが初戦前日から発熱と倦怠感を訴え診療をしましたが、内服薬で解熱したため初戦に出場しました。その後、準決勝試合途中にも左股関節内転筋腱を損傷しましたが、鎮痛剤にて決勝まで出場しました。

第 2 戦では主力プレイヤーの 1 人が鼻骨骨折を疑わせる鼻出血をきたし、オンアイスでの診察をしました。アイスホッケーでは鼻骨骨折は止血していれば、防具の変更で試合への出場は可能です。ガーゼパッキングで止血を行い、吐き気、めまい、頭痛などの中枢神経症状がなかったため、準決勝、決勝にも出場しました。大会終了後の病院での検査では転位のない骨折が認められ、経過観察のみで支障なく日常業務に復帰しています。

準決勝では元トップリーグ（アジアリーグ）選手 5 人を擁する北海道、決勝では関東大学リーグ選抜メンバーで構成されている東京を撃破し、見事 4 年ぶり 11 度目の優勝をはたしました。現監督、コーチは成年チーム選手時代から、現選手は少年チーム時代から気心が知っているメンバーとなったため、ドーピングへの対応、国体前後の健康管理など連携ができています。国体の中でも抜群の成績を誇る競技に帯同でき、さらに 8 回の帯同で 2 回目の優勝の現場にいらわせたことは非常に嬉しく光栄でした。今後も選手、スタッフが気軽に相談できるドクターの 1 人として研鑽して参りたいと思います。

記 青森労災病院整形外科 佐藤英樹

